

高等教育研究センター

かわらばん

春

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第38号

「秋入学」論議を機に

昨年度、秋期入学への全面的移行を前提とした「中間まとめ」が東京大学から提出され、多くの大学や社会に強いインパクトを与え、幅広く話題になってきています。この三月末には最終報告書が提出されました。一般に大学をめぐるニュースは社会的関心を引くことが少なく、新聞やテレビで取りあげられても、すぐに忘れ去られてしまうものが多いにもかかわらず、この件は最近も新聞で大きく扱われたりしています。このところ、大学をめぐる危機的な状況を指摘する書物なども多数出版されてきているなかで、グローバル化、一八歳人口の減少、グローバル人材の養成、受験競争の弊害など、さまざまな課題を一気に解決する可能性を秘めた施策として注目を集めています。

堅持かという二者択一的な論調で語られたりすることもしないで、少なくとも、秋入学に対して慎重であつたり時間をかけて考えようとするのが、そのまま大学教育の改善に対して後ろ向きであるとするような、やや短絡的ともいえる見方が影を潜めつつあることを好ましく感じています。もちろん現在の大学に変えていかなければならない点が多くあることは確かですが、そのために取り得る施策のなかで、秋入学への（部分的、段階的、または全面的な）移行は唯一の選択肢ではありません。

ようやく冷静な議論ができるようになってきたこの機会をとらえ、大学の構成員の一人としての願いを込めて、今後秋入学を考えていく際に重要に思われるひとつの点について述べておきたいと思います。

が多くあることは確かですが、そのために取り得る施策のなかで、秋入学への（部分的、段階的、または全面的な）移行は唯一の選択肢ではありません。

ようやく冷静な議論ができるようになってきたこの機会をとらえ、大学の構成員の一人としての願いを込めて、今後秋入学を考えていく際に重要に思われるひとつの点について述べておきたいと思います。

る際に見られた性急ともいえる
気分がやや落ち着いてきたよう
に思われ、移行へ向けて待った
なしの危機的状況であるという
とおり立てるような議論や、賛
成か反対か、全面移行が春入学

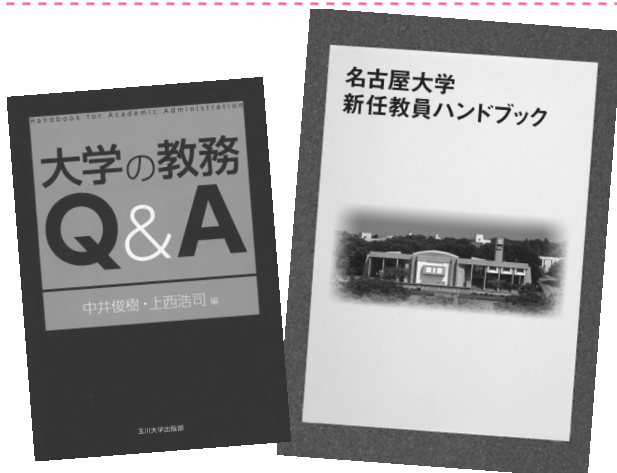
「中間まとめ」が公表されて以来数ヶ月が過ぎましたが、秋入学の問題は、何よりも「大学はどのようにあるべきか」という問いを各大学が今一度自らに課す、またとない好機となった

のではないだろうか。というのも、この問題は秋入学に移行するか否かという論点だけに決して限られるものではなく、結局のところは「大学とは何か」、「大学は何をめざすのか」というところに重要なポイントがあるように思われるからです。

なぜならば、秋入学への全面移行のような大がかりな変革を、実際に行くか否かの判断に際し、当然そのメリットとデメリットをていねいに比較して検討を重ねていくことが必要になります。が、もしも大学とは何か、何をめざすのか、というヴィジョンが多少とも見えていないとしたら、こうしたメリットとデメリットも、ごく一般的なものしか洗い出すことができないからです。大学が未来像を提示し、その実現に向かって歩んでいく時間の流れのなかに秋入学を置いてみることで、必ず見えてくるものがあるはずですよ。

言うまでもありませんが、秋入学は大学の目的そのものではなく、あくまでも何らかの目的を実現に導くための手段であり、しかもその選択肢のひとつにほかならないわけですから、この

高等教育研究センター
新刊のご案内



2011年度名古屋大学学生論文コンテストの結果発表

本年度の応募21論文について厳正なる審査の結果、下記4名の受賞が決まり、表彰式が行われました。受賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリにてご覧いただけます。学部生に「論理的な文章を書く経験」を奨励するのがねらいの本コンテストは、来年も1月上旬の応募締切を予定しています。

- 優秀賞（附属図書館長賞）
なぜ日本人は世界一素晴らしい医療に世界一不満を持つのか？
医学部 1 年 田中健一
- 優秀賞
障害者に対する職場内ハラスメントと今後の対策
法学部 1 年 朴 鎮洙
暴力の時代における情念の浄化装置としての絵画
医学部 4 年 山田悠至
J-POP から見る若者の心象風景～「逢いたいソング」についての考察
教育学部 1 年 高井崇佑



「大学教育改革フォーラムin東海2012」を開催しました

2012年3月3日(土)、「大学教育改革フォーラムin東海2012」が名古屋大学東山キャンパスES総合館を主会場にして開催されました。今年の参加は237名、7つの企画セッション、ポスター発表40件にミニワークショップ1件と、充実した1日となりました。

各セッション、報告において取り上げられたテーマも多岐に渡りました。なかでも、震災を受けての大学のあり方や危機管理の問題、学生の主体的な学

びを支援する環境や仕組みづくり、教養教育の再考、教職員の自発的な能力開発の取り組みなどは、さまざまな形で取り上げられ、議論されました。

大学における実践の智恵を交換共有するために始まった本フォーラムも開催7回目を数えました。当日の闊達な意見交換が、日々の活動のための英気と実践の智恵とを養う場となっていましたならば幸いです。ご協力、ご来場いただきました皆さまに感謝申し上げます。(齋藤芳子)



かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

院生・ポスドクのキャリア支援事業報告

■高等教育研究センターと多元数理科学研究科の共催により「院生ポスドクキャリア形成支援セミナー(数学系)」を3回シリーズで開催しました。各回の講師には、ご自身のキャリアと数学を応用した実践経験についてご紹介いただきました。多元数理科学研究科をはじめとするさまざまな部局の大学院生、研究員の参加があり、講師から、また参加者どうしのよい刺激がありました。(元研究員 豊田哲)

第1回「これまでの研究とアカデミックキャリアの形成について」

(2011年11月18日)

講師：川上裕 氏(山口大学大学院理工学研究科講師)

第2回「Penner-Andersen によるタンパク質の Fatgraph Model」

(2012年1月13日)

講師：田中亮吉 氏(京都大学大学院理学研究科数学教室)

第3回「高信頼ソフトウェア開発における数学」(2012年1月27日)

講師：今井宜洋 氏(有限会社 IT プランニング)

■高等教育研究センターでは文学研究科教育研究推進室と留学生センターのご協力を得て、日本文学・語学・文化学を専攻する院生・ポスドクのための研修「英語で教える」を実施しました。受講者は、授業設計法や英語による講義の秘訣を学んだのち、公開セミナー "Introduction to Japanology: Aspects of Expression in the Japanese Culture" の講師を務めました。セミナー当日には、留学生、外国人教員、留学を検討している日本人学生など幅広い参加があり、好評のうちに終了いたしました。また、研修参加者からは、自らの研究成果を英語によって発信するためのノウハウ、授業の構成・設計やインタラクティブな授業づくりについても学ぶことができたとの振り返りがありました。(元研究員 東望歩)

研修A「英語で教えるー授業設計・教授法とコミュニケーションー」

(2011年9月21日)

講師：安井永子 氏(文学研究科)、中井俊樹 氏(高等教育研究センター)

研修B「英語で教えるースピーチとライティングー」(2012年1月23日)

講師：Robert Croker 氏(南山大学)、岩城奈巳 氏(留学生センター)

公開セミナー「GSI Seminar for International Students "Introduction to Japanology: Aspects of Expression in the Japanese Culture"」

(2012年2月13日)

担当：水川敬章、玉田沙織、松野美海、大竹瑞穂

イジョンを見定めることはきわめて困難であるように思われますが、そうであればこそ、もう一度自分自身を国際社会や地域社会との関係のなかで見つめ直してみることが必要であると考えます。そして名古屋大学における教育の魅力ある未来像を社会や大学全体に向けて提示し、それに照らして秋入学などの問題も議論できるようにして頂ければと願っています。

じつは東京大学からの「中間まとめ」をていねいに読んでみると、そこには、秋入学への全面移行という提言ばかりでなく、その背景となっている日本の高等教育の現状や未来に関わるとともに、それを包みこむ社会全体にも波及する重要な問題が多々指摘されています。これを真摯に受けとめて、本格的な議論を行うための条件が整いつつあるこのような機会を逃さず、単に秋入学だけを切り離して論じるだけでなく、これらの問題点に対する最善の解決策を提案して実行するため、一過性のものに終わらせずに、今後も継続してさまざまな観点から前向きに議論を成熟させていくことが必要となるでしょう。

(前センター長 木俣元一)

「メンター・アワード2012」優秀賞受賞

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。高等教育研究センターでは、2005年より新任教員がキャリアを築く上で相談することができる教員メンタープログラムを実施しています。

現在では、新任教員およびメンター教員のそれぞれのガイドを作成し、男女共同参画室と連携して進めるなど、プログラムの充実を図ってきました。その効果が認められ、2012年2月に「メンター・アワード2012」(ワーキングウーマン・パワーアップ会議)に選ばれました。

近年では人件費の削減、任期制の導入など大学教員職の不安定化が進んでいます。このような厳しい環境のもとでは、新任教員のキャリア面および心理面での支援を行う教員メンタープログラムがますます重要になると思われます。今後ともプログラムへのご協力をよろしくお願いいたします。

(中井俊樹)



※プログラムの詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/mentoring/>
<http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/mentoring/>

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『大学教育の臨床的研究』

田中毎実 著 東信堂 2011年

本書は、京都大学高等教育研究開発推進センター長を務める著者が、定年退職を機にこれまでにやってきた大学教育改善に関する研究や実践活動を総括したものです。

本書のいう臨床的研究とは、「教える人たちの自省や自己認識と協働しようとするタイプの研究」をさします。その重要な領域の一つとして、本書はFD活動を位置づけています。同センターは

FD活動の理念を「相互研修型FD」に求め、その実現のためにこれまで多様なFD活動を実施してきました。FDということからは、専門家が一般教員に対して授業改善の進め方等について知識・ノウハウ等を伝授する形式のものを思い浮かべがちです。また、行政主導、トップダウンによる活動との印象が一定程度普及していることも否定できません。

これに対して、相互研修型FDは、教員が実践や研究を通じて授業を含めた教育全体の改善方策を見出し、それを実際の場面に活かしつつ教育改善を進めることを目的とするものです。その組織化は、日常性とローカリズムの尊重と、教員による主体的自律的な連携が特徴です。その意味では、人口に膾炙しているFD概念とは大きく異なります。

教育やその改善活動が大学教員にとって内発的欲求になりにくい要因の分析などを示したうえで、相互研修型FDの理念を謳いその実現を呼びかけています。大学教育をめぐる環境が厳しくなっている中で、真に有効な教育改善方策や、その具体的な実施方法が求められている現在、本書から学ぶものは多いと思われます。(夏目達也)

高等教育研究センタースタッフ(2012年4月現在)

センター長 早川義一 専門領域：制御工学

国内客員

松塚ゆかり

(一橋大学大学教育研究開発センター)

名古屋大学高等教育研究センター

教授

夏目達也 専門領域：高等教育学、技術・職業教育論

淵上 克義

(岡山大学大学院教育学研究科)

准教授

近田政博 専門領域：比較高等教育学、学習支援

橋本 鮎市

(東京大学大学院教育学研究科)

准教授

中井俊樹 専門領域：大学教育論、高等教育マネジメント

外国人研究員

胡 建華

(南京師範大学教育科学学院)

助教

齋藤芳子 専門領域：科学技術社会論

リュ ジホン

(国立全南大学教育学部)

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/